

カイトと
リュウさんの

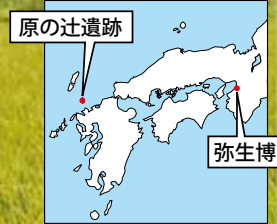
遺跡へ行こう

その1

いきこく 海の王都
はる つじ
原の辻遺跡



カイトとリュウさんは、大阪府立弥生文化博物館の展示品から飛び出した、博物館のキャラクター「館キャラ」です。本冊子では「弥生遺跡」や各地の「博物館」を訪ねて日本中を駆けめぐります。二匹？の活躍にご期待ください！



本冊子は、文化庁からの補助金を受け、日本全国の代表的な弥生遺跡を紹介するために制作しました。

遺跡へ行こう



発掘調査をもとに中心的な建物が復元されています。

周辺の建物とかは復元されていないけどこんな感じだったかもしれないね。

原の辻 一支国王都 復元公園

船着き場

門と柵

墓域

集会所と長老の家

迎賓場

交易の倉

門と柵

王の館

穀倉

居住域 物見やくら

祭儀場

トリモケ！いつの間にかどうやって来たんや!?

倉と主祭殿

倉の内部

物見やくら



さすがに大きいなあ。どんな王様やったんやろか。

これは「王の館」。原の辻遺跡では発掘された建物の形や位置関係から何のための建物か推定して復元しているんだ。

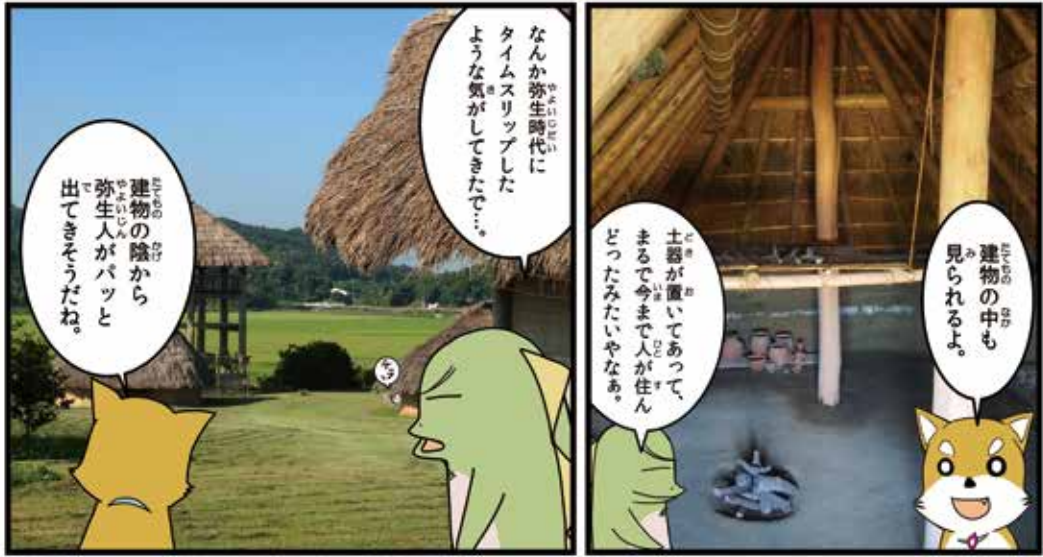


この史跡公園には仲間がいるので飛んで会いに来たのです。

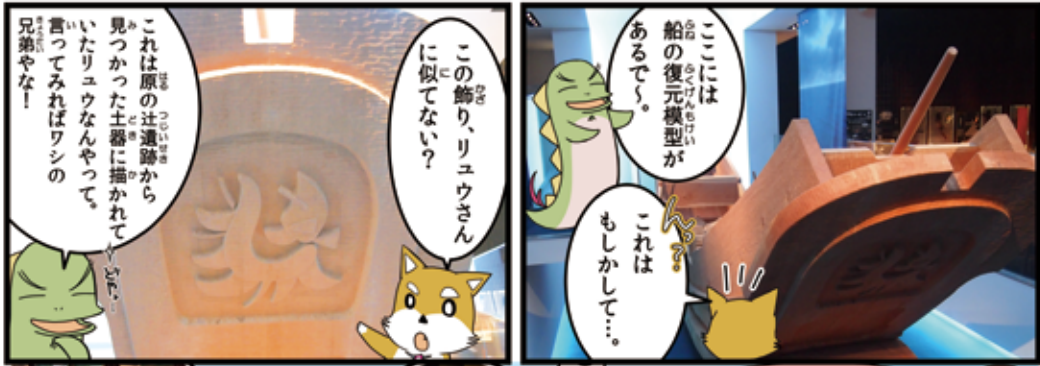
弥生博覧会...? すいね。

日本列島は、いまでこそ「日本」というひとつの国にまとまっていますが、弥生時代にはたくさんのクニがそれぞれの地域で独特な文化を築いていました。

遺跡へ行こう



本冊子で紹介する遺跡を訪れば、出土した遺構や遺物はもちろん、遺跡の周りの自然や地形環境、気候のほか、遺跡の立地など、自分たちの地域とは異なる部分に気が付くはず。



島国ならではの多様な風土が生み出した、特色豊かな弥生文化。それはいまの日本文化の源流となるものです。時には、悠久の時を超え、遙か先人たちの叡智に想いを馳せてみませんか。

「魏志倭人伝」に登場!

一支国



ここからはワシ、Dr. ハルが紹介しよう! みんなは「魏志倭人伝」と言う名前を聞いたことがあるか

の? 「魏志倭人伝」とは、あの有名な中国の歴史書『三国志』の中に書かれた一節なのじゃ。この中で日本は「倭」と呼ばれておる。あの有名な「邪馬台国」や「卑弥呼」も「魏志倭人伝」に書かれた名前なのじゃよ。

さて、「魏志倭人伝」には邪馬台国や多くの国の名前が登場するが、一支国はそのなかでもわりと多く(といってもわずかか五七文字じゃが)の情報が記されている。その内容はざっとこういふものじゃ。

「また南に一海を渡ること千余里(ここでは香岐の北に浮かぶ島「對馬国」(現在の長崎県対馬市)から出発して)一大国(一支国の書き間違いと言われている!)にたどりつく。この海は瀚海(大きな海)と名付ける。この

国の大官(役人)もまた卑狗、次官を卑奴母離という。(島の)広さ三百里平方ばかり、竹木・叢林が茂り、三千里ばかりの家がある。ここには少しの田地があるが、水田を耕すだけでは食料が足らず、やはり南や北へ海を渡って交易をして暮らしている」



▲「弥生博のカイトとリュウさん」第25話より(一部加筆)

どうじゃ? なんとなく弥生時代の風景が思い浮かんできたかの? ちなみに、「魏志倭人伝」に登場する多くの国々の中でも、国の正確な位置と王のいた都の場所(つまり原の辻)が特定されているのはこの一支国だけなのじゃよ。

交易の都・原の辻

さまざまな交易品

さて、「魏志倭人伝」に記された一支国じゃが、本当にそんな様子じゃったのかの? 一支国の記述の最後に、「南北市糴(しじやく)、つまり、南や北へ海を渡って交易をしているとあったが、弥生時代にこの荒波を越えて国々を行き来することはできたんじやろうか?

実は、それを裏付けるモノが原の辻遺跡からは発見されている!

それは、中国や朝鮮半島など、外国でしか作れなかったとされる、鉄や銅などの金属製品、数々の大陸製土器、勾玉やトンボ玉(ガラス飾り)などの装飾品、そして大陸の文化や技術などじゃ。特に金属製品は、銅鏡のほか中国で使われた最新式の鍔(矢につけるやじり)、鉄製の農具や大工道具など珍しいものが多い。



▲トンボ玉



▲権

さらにその中でも、へおもり▽とへお金▽は特別じゃ。権と呼ばれるおもりは、モノの重さを量るために使われ、モノとモノを交換するときの基準になっておった。市場で倭人(日本人)と大陸の人々が交易をしていた証拠とも考えられておる。そして、二〇〇〇年前の中国で使われていた貨幣(お金)もたくさん見つかったおる。ただし、さっきも話したとおり、当時の倭の国はまだモノとモノ、へ物々交換の時代じゃ。この貨幣はめずらしい交易品として持ち込まれたのじゃろう。



▲大泉五十



▲貨泉

カイトとリュウさんの 遺跡へ行こう

そのほかにも、稲作などの農耕技術や建築技術、機織やト骨（占い）など、様々な文化も伝わっており、このように、一支国は、大陸と日本本土（北部九州）の間に位置することから、多くの人々が行き交う交易の拠点として栄えたのじゃ。おっ、そうじゃ！大陸の文化といえは…、原の辻遺跡からは多くの犬の骨が発見されておる。その中には刃物で切られた骨も含まれるのじゃ。これはつまり、当時の人は犬を食べていた（大陸の人々にふるまっていた？）ことを意味するのじゃ。んっ…おお！怖がらんでもいいぞ、カイト！昔の話じゃ、昔の…



一支国の王都・原の辻

原の辻は深江田原と呼ばれる、長崎県第二位の面積を誇る平野（第一位は有名な諫早干拓地じゃの）に突き出した丘に営まれた弥生時代の集落であり、そして一支国の王都じゃ。原の辻遺跡の周囲にめぐらされた環濠の長さは南北に約七五〇メートル、東西に約三五〇メートルで、環濠内の面積だけでも約二五

クタール（甲子園球場六・五個分！）にもなるのじゃ。あの佐賀県吉野ヶ里遺跡と同じくらい面積のじゃ。そして、原の辻の中でも最も高い場所におったのが王じゃ。高台はまた、神聖な祭祀空間でもあり、巫女によるト骨なども行なわれておったのじゃ。ほかにも多くの竪穴住居や掘立柱建物、そして物見櫓など一〇〇を超える建物が発掘調査で見つかったおる。マンガで紹介したように、現在はそのうち一七棟の建物が復元され



▲船着場

ておるぞ。さらに、環濠の外には水田の跡も見つかっておる。弥生時代の代名詞でもある稲作のほか、麦や様々な植物を栽培していたのじゃ。

そして、なんといっても忘れてはいかんのが「船着場」じゃ！発掘調査で、王都・原の辻から一〇メートルほどはなれた低地から、船着場の跡が見つかったのじゃ。この船着場は、中国大陸から伝えられた建築技法を用いて造られたものじゃった。船着場としては東アジアで最古の例なのじゃよ。当時は、大陸や朝鮮半島からはるばるやってきた人々は、原の辻から数キロ離れた湾に大きな船をつけて、そこから小型の丸木舟に乗りかえてこの船着場まで川をさかのぼったのじゃろう。

きちみんね

一支国博物館

さて、このように原の辻遺跡は、学術的に大変重要であることから、平成一二年、弥生時代の集落遺跡としては静岡県の登呂遺跡、佐賀

県の吉野ヶ里遺跡に続き、三番目の国特別史跡に指定されたのじゃ。いわば、遺跡の国宝じゃな。立派なことじゃ（しんみり）。そして、そのすばらしさをもっとたくさんの人々に知ってもらうため、一支国博物館では原の辻のことを詳しく展示しておる。

一支国博物館は、原の辻のあった深江田原（平野）を見下ろす丘の上に建っておる。遠くから見ると、山の中からニョキッと展望塔がはえているようじゃ。あの有名な建築家、故・黒川紀章氏の最後の作品でもあるのじゃよ！まだ開館して六年目じゃが、ワシの研究所もそこにあるので行ってみよう。館内は、海に浮かぶ交易の都として栄えた原の辻のイメージ通り、深い青色が美しいんじゃよ。



ニョキッ！

さてさて、展示室には、当時の集落の様子を再現した巨大なジオラマがあるぞ！そこには一六〇体の人形がイキイキとしたすがたで生活しておる。リアルで

カイトとリュウさんの 遺跡へ行こう

コミカルなその様子は、みんな見入ってしまうぞ！
そして、ジオラマの周りには原の辻遺跡から出土した遺物がずらりとならんでおるんじや！すばらしいものばかりあって目移りするの。



また、博物館の中には、長崎県埋蔵文化財センターや、吉崎市文化財課の事務所や作業場がある。一部は見学もできるぞ。

そのほかワシの研究所である「キッズこつこがく研究所」では、いろんな考古学体験ができるのじや！なんと、ワシに

質問を書いて人面石ポストに入れると、みんなの家に返事が届くかもしれんぞ！



▲人面石ポスト

原の辻に勝るとも劣らない！ 「カラカミ遺跡」と「車出遺跡」

今から約二〇〇〇年前、原の辻が栄えたところ、吉崎島にはほかに大きな集落がふたつあった。ひとつは、島の真ん中からやや北西寄り、山の頂上付近に形成された「カラカミ」、もうひとつは、原の辻のそばを流れる幡鉾川の上流、島の真ん中から南西寄りに栄えた「車出」じや。

これまでの発掘調査で、カラカミ遺跡からは、原の辻遺跡ほどたくさんのおやそのほかの建物跡は見つかってはおりませんが、原の辻とおなじく、環濠がめぐらされた集落であったことがわかつたお。アワビオコシ（その名の通り、アワビを取るときに使う道具じや）などの漁労具がたくさん見つかつておるのじや。また、大陸から持ち込まれた土器や金属製品、ト骨なども見つかつておることから、交易を行いながら漁などを行う、海の民であつたと言われてきた。しかし最近の発掘調査で驚くべきことが判明したのじや！なんと、直径八・五メートルを越す大きな竪穴建物の中から、ハ地上式炉（ハ鉄などの金属を加工する鍛冶工房）の跡が発見されたのじや。当時の日本列島には、まだ地上式炉を用いる技術は伝わつていなかつたとされる説をくつがえ



▲カラカミ遺跡出土 土器

ら、海の中やあちらこちらから、海の魚の骨やアワビ、サザエ、カキなどの貝殻、クジラなどの骨から作られた釣り針、モリ、

す大発見だつたのじや。原の辻とおなじく、大陸との交易の窓口として、進んだ文化技術を持つておつたのじやな。それともうひとつ、カラカミ遺跡からは、ハイエネコ（ヤマネコのような野性ではないネコのこと）の骨が見つたのじや。これも、最初に日本列島にイエネコが入つてきたとされる時代を、大きく更新したのじや。



ん？なんじや？
あ、安心せいで！
カイト。イエネコは食つてはおらんかつたぞ。



ううっ...

カイトとリュウさんの 遺跡へ行こう



▲車出遺跡出土 土器

さて、次は車出じゃな。車出遺跡からはこれまでにたくさんの土器が発見されておる。発掘調査が進めば、原の辻を上回る量の遺物が出土する可能性があるともみてる！やはり大陸から持ち込まれた土器や金属製品、ガラス製装飾品やお金などが発見されておる。しかし、モノが出るわりには、原の辻遺跡のようなたくさんさんの建物や、大勢の人々が生活した跡が見つかっておらん。現在発見されているモノの種類から、祭祀的（マツリや占い）な性格が強い集落では？とされておるが、実のところはまだはっきりとして

おらんのじゃ。原の辻があった深江田原に次いで、吉崎島で二番目に大きな平野で、農耕生活を送りながらマツリを行う、そんな神秘的な生活を送っていたのさ。

原の辻とカラカミ、車出と、三つの集落は、いずれも大きな湾に流れ込む川の上流に形成されたことが特徴じゃ。川を下って湾に出て、そこから船で大海原に漕ぎ出し、交易を行っていたのじゃろうな。また原の辻と車出は、同じ川の上流と下流に位置するため、川づたいに行き来できたじゃろう。そしてまた、車出近くの半城湾から、カラカミ近くの片苗湾まではすぐそばじゃから、小さな丸木舟でも行き来できたと思っぞい。じゃから、吉崎島全体の集落をあわせて「一支国」であったと考えられるのじゃが、どちらにしても、最新技術で造られた船着



場を持ち、様々な建物が建ちならび、大勢の人やモノでにぎわう原の辻遺跡こそが、一支国の王都であったことは間違いなさそうじゃ。

どうじゃ。一支国のスコサがわかってくれたかの。美しい自然の中に点在する歴史とロマン！

皆が来るのを待っておるぞ。



平成二七年度文化庁
地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業
「カイトとリュウさんの遺跡へ行こう」
その1 一支国 海の王都 原の辻遺跡
企画・編集・館キャラ連携プロジェクト実行委員会
大阪府立弥生文化博物館
マンガ・宮野ミケ
テキスト…吉崎市立一支国博物館 河合恭典
発行日…平成二七年九月三〇日
印刷所…株式会社中島弘文堂印刷所



吉崎市立 一支国博物館
IKI CITY IKIKOKU MUSEUM

住所：〒811-5322
長崎県吉崎市芦辺町深江
鶴亀触 515 番地 1
電話：0920 - 45 - 2731
開館時間：8 時 45 分～ 17 時 30 分
(入館は 17 時まで)
休館日：月曜日 (月曜日が祝日の場合は翌日)
12 月 29 日～ 12 月 31 日
※GW および夏休み期間中は無休
<http://www.iki-haku.jp/>



吉崎原の辻遺跡

住所：〒811-5322
長崎県吉崎市芦辺町深江
鶴亀触 1092 番地 5
電話：0920 - 45 - 2065
開館時間：8 時 45 分～日没まで
<http://www.iki-harunotsuji.jp/>